

心に沁みる「ことば」

例年のない酷暑の中で小・中・高等学校では2学期がスタートしました。、厳しい残暑に早く秋風が取って代わってくれるのを心待ちに、先生方のご自愛を願います。

かつて大学生のころに、デルフォイのアポロ神殿に刻まれていたという「汝自らを知れ」という格言を教わりました。授業では、「かの毒杯をあおったソクラテスは、この格言に導かれ、当時のアテナイの人々が金銭や名声を求めることばかりに気を配り、「魂」をすぐれたものにするに気を配らないでいることを問題にし、そのことを徹底的に批判した。「魂」への気遣いを忘れるなら、何のために生きているのかという生の意味自身が不明になると考えたからである。」と講義いただいたように記憶しています。

ここ最近の、いたいけない子どもがあいついで犠牲になる事件、不在高齢者に関わっての年金不正受給などなど、謹厳、実直といわれた日本人の特性が溶けていくのではとの危惧を禁じ得ません。

さて、この夏は教職課程の集中講義で「大村はま氏のことば」を扱う機会を得ました。著書「灯し続けることば」を通しての、同氏の思想、考え、大切にされていたこと、生き様に学生達はそれぞれに感銘を受けたようですが、彼らが一様に感動したのは「優劣のかなた」と題する同氏の最後の詩でした。この詩を作るに当たって、同氏が人生の最後に一番大事にされた「ひたすら」という「ことば」は次の一節にあります。

学びひたり
教えひたる、
それは、優劣のかなた。
本当に持っているもの
授かっているものを出し切って、
打ち込んで学ぶ。
優劣を論じあい
気にしあう世界ではない、
優劣を忘れて
ひたすらな心で、ひたすらに励む。

学生たちは、これまでの学校生活への振り返りからそれぞれに感ずるところがあったのですが、この一節を読むと、かつて勤務した高等学校で出会った高齢の生徒、在日のKさんの「ことば」がオーバーラップします。

そこでは一つのキャンパス空間の中に時間差で2つの異なる全日制と定時制の学校がお互いの文化を尊重しつつ、お互いの存在を主張していました。

定時制課程に学ぶ生徒たちは背景もさまざまなら、年齢も10代から70代までとまるで社会の縮図でしたが、高齢の生徒さん達が一人の例外もなく、校門をくぐるときに「今日もよろしくお願ひします。」下校時には「ありがとうございました。」と立ち番の先生に挨拶をされるのは驚きでもありました。

当時70歳手前だったでしょうか、Kさんと心やすくなりました。クニに帰るたびに「校長先生おみやげ持ってきた。食べて。」とキムチを差し入れてくれたものですが、ある時、彼女に「Kさんもそうだけど、年齢の高い人が、暑い日も寒い日も休むことがないのはなぜ？」と問いかけましたら、「私はな。戦争中は学校に行きとても行けんかったので、頭

が栄養失調やね。若い子らには簡単なことでもこの歳になると難しいわ。せやけど、今日一つ勉強して、ちょっとでもかしのなることが嬉しいね。それに、私らにわからせよ思うて先生らが一生懸命教えてくれはるのに休むことはできんよ。」

時代の流れの中で、昨年、72年の歴史に幕を下ろしましたが、定時制課程では教育に関わる者が忘れてはならないことを、生徒さんを通して随分と学ばせてもらいました。その余のことについては機会をいただければ、またお伝えしようと思います。

中垣芳隆